

都市政策専門員 意見要旨

1	日 時	令和2年(2020年)7月10日(金) 14時05分～14時40分
2	場 所	隈研吾建築都市設計事務所
3	出 席 者	都市政策専門員(建築家、東京大学特別教授・名誉教授) 隈 研吾氏 鎌倉市長 松尾 崇氏
4	議 題	建築家 隈研吾氏(都市政策専門員)と市長との対談 「NEW OLD KAMAKURA ～アフターコロナのまちづくり～」
5	議 事 要 旨	<p>1 令和2年(2020年)1月25日開催のシンポジウムを振り返って</p> <p>松尾市長 シンポジウムにおいて、これからの世界の建築は、20世紀型の大きく高いものから、低く、自然や伝統を大切にした建築に変わっていくという話があった。</p> <p>鎌倉市では、深沢地域において、低く、自然や伝統を大切にした建築やAI・IoTなどの活用により、新たなまちづくりを実現していきたい。鎌倉市は、こうしたことで世界をリードできるようなまちを目指していきたいと考えるがいかか。</p> <p>隈専門員 シンポジウム直後の新型コロナウイルスの感染拡大により、低く、自然と一体となったまちづくりを行うことが緊急の課題であるということがはっきりしてきた。</p> <p>シンポジウムの時点では、未来像として語っていたことが、新型コロナウイルスの感染拡大により、明日にでも舵を切っていかなければならないこととなっている。シンポジウムでの予言的な話について、どう具体化するか、という段階にきている。おそらく、市長の頭の中には、深沢地域などでの具体的なイメージがあり、新型コロナウイルスの感染拡大により、その具体的なイメージが市民にも理解しやすくなったのではないかという気がした。</p> <p>松尾市長 シンポジウムでの発言の通りとなったと思う。新型コロナウイルス感染拡大の前に考えていたことが、感染拡大により、逆のことを考えていくということではなく、むしろ方向性が鮮明になった。我々としても、人中心のまちづくりを深沢地域整備事業の中でしっかりと進めていかなければならないということを改めて感じているところである。</p> <p>もう一つシンポジウムで話題となったのが、ウォーカブルなまちづくりである。人と人の距離が近く、歩いていて楽しい、気持ち良いまちづくりということについて、オープンスペースの在り方や沿道の建築物との関係など、「歩きたくなる」という視点で、どのように考えるか。</p> <p>隈専門員 ウォーカブルなまちづくりという世界の流れは、環境問題から生まれたのだと思う。20世紀においては、公共交通機関よりも車に頼ることで、急速に都市が歪んでいった。車に頼</p>

		<p> るということは、人間の健康にもストレスを与えている。事務所という箱で缶詰めになって働いて、車で自宅に帰るとい う 20 世紀の工業化社会型のライフスタイルは、人間に対して 大きな負荷や歪みをもたらしたことが、新型コロナウイルス の感染拡大によってはっきりしたと思う。そこで、どうやっ て箱から出て、歩いて、自分のリズムや健康を取り戻すか、 ということが、これからの大きな課題として浮かび上がって きた。そういった意味で、ウォークアブルなまちづくりを掲げ ている市長の考え方は追い風を得たように感じる。 </p> <p> 松尾市長 深沢地域のまちづくりについては、「ウェルネス」をテーマ にしている。「ウェルネス」は「健康」とも言い換えられるの だが、歩いて健康になることのほか、心の健康ということも 非常に大事なことであり、このまちに来ると、心も体も健康 になるというまちづくりができると思う。 </p> <p> 限専門員 コロナ禍において、低く、自然とともにある建築の必要性 が、現実味を帯びてきていると思うが、具体的にどういう形 で進めていくと実現できると考えるか。 </p> <p> コロナ禍において、「箱からの脱出」ということを、私だけ でなく、色々な人が言い始めているのだが、なぜそう言われ ているかという、今は、箱の外にいても ICT の力を借りて 効率的にストレスなく仕事することができるためである。ICT の進歩によってそうした働き方が可能となっているのに、コ ンクリートの箱の中に全て詰め込んで仕事することが一番効 率的だという、第二次世界大戦後の社会のイメージで都市を 考えてきたことの付けが回ってきたように思う。仕事だけの 問題ではなく、教育においても同様に、学校という箱の中に 子どもを詰め込んで、同じ試験を行い競争させるということ が、どれだけ子どもたちに負荷やストレスを与えてきたこと か。そういったことが、いじめなどの問題全てに関係してい るのではないかと気づき始めたのだと思う。 </p> <p> 箱からの脱出とは、単に裸一つで出るということではなく、 この数十年で手に入れた ICT の技術を持って出るということ である。そのようにして脱出した箱の外の場合として、深沢地 域のまちを考えると良い。深沢地域のまちづくりは、まさに これから始まるものであり、ICT 技術を仕込むことができる。 そういう意味で、ポスト箱の仕事の仕方などのモデルが、全 国初、あるいは、世界初として、深沢地域で実現できるかも しれないタイミングであると感じる。 </p> <p> 松尾市長 新型コロナウイルスの感染拡大による様々な変化につい て、現実をしっかりと捉え、未来に向けて新しい価値を作っ ていくということが大事であり、まちづくりを進めるチャン スとしていきたいと考える。 </p> <p> 2 鎌倉市におけるアフターコロナのまちづくりについて 松尾市長 アフターコロナにおいては、様々なことがミックスユーズ ドとなり、人と人が重なり合いながらまちを造っていき、そ こにこそ、人と人との繋がりが生まれるとイメージしている。 </p>
--	--	---

		<p>これまでも、用途地域の考え方など、都市計画法の限界といったことが言われてきている中で、アフターコロナの都市計画の在り方についてどのように考えるか。</p> <p>限専門員 現在の都市計画の考え方は、第二次世界大戦後に始まるものである。戦後に世界中で都市計画や建築の法律が整備された。商業地域や工業地域などを用途地域として指定して、指定した建物用途のみ建築できるようになった。確かにその時代の工場は、酷い煙や音を出すため、住宅から離れたところに建築してほしい、となる。その時代のオフィスは、箱の中に詰め込まれた働き方をするため、高層ビルは住宅の近くにあったら嫌だな、となる。こうして、住宅とオフィスの地域も工夫されるなどした。しかしそれは、20世紀前半の人間の働き方や技術を前提とした都市計画であり、今の状態とは全く合っていない。それにも関わらず、都市計画法を見直すことなく現在に至ってしまった。これは、日本だけでなく、世界中で問題となっていることである。</p> <p>新型コロナウイルス感染拡大により、どうして ICT 技術がこんなに進んでいるのに自宅で仕事する人が少ないのだろうか、という疑問に立ち返ることとなった。ゾーニングに代わる都市計画は、市長のようにリーダーシップのある人が、具体的にある地区でミックスユーズドのまちづくりを実践することにより可能となると考える。是非それを見たい。</p> <p>松尾市長 ミックスされたまちは、単に新しい働き方ができるということではなく、まちとして楽しいということが大事である。20世紀の都市計画でできたまちは、オフィス街は夜になると人がいなくなり閑散とし、住宅街は昼に閑散としている。それは非常に不自然な時間の使い方であり、ミックスのまちは、どの時間帯においても、誰かが何かをしていて、楽しい。防犯・防災上も必ず誰かが居るとい、様々な意味で人間を守ってくれるまちであると思う。そのようなまちを早く見たい。</p> <p>深沢地域のまちづくりでは、防災や安全安心について非常に重要なテーマと考えている。話を聞いていて、安全安心は、人がまちに居るといことでも手に入るものであると思った。</p> <p>鎌倉市民は、市民活動から古都保存法が生まれたことを誇りに思っている。先ほど都市計画法の限界といった話もあったが、全国的に抱える人口減少社会という課題がある中、鎌倉がまちづくりの先進事例を作っていくに当たり、どのような配慮が必要と考えるか。</p> <p>限専門員 人口が減少すると、例えば、空き家や空きビルの問題など様々な現象が起きてくる。その現象は既に起きているのだが、空き家や空きビルは、使い方によりプラスの価値を持ち得ると考える。例えば、鎌倉においては、若い人が古民家を利用して商売する事例が多くあると思う。全国の中でも鎌倉が一番の先進事例を出している場所ではないか。そういう意味では、人口減少時代の新しいモデルも鎌倉発で創ることができると考える。鎌倉のまちには、様々な先進的な要素があり、</p>
--	--	--

		<p>まち全体を上手くリノベーションしていくことを行政が後押しできると良いと思う。</p> <p>松尾市長 これまでは、新しくゼロから造ったピカピカの店舗が格好良い店舗とされていたが、今は、むしろ新築が格好悪いという感性がある。鎌倉には、そのような感性を持った人が経営する店舗が多いと思う。それは新しい感性だ。そのような感性を持った人は、日本の中で、東京でも京都でもなく、鎌倉に集まってきている気がする。</p> <p>松尾市長 そういったところをどのように活かしていくかということに配慮していく。</p> <p>隈専門員 鎌倉市は、ゼロからまちづくりを行う深沢地域、鶴岡八幡宮を中心とした旧鎌倉地域、商業地域である大船地域の大きく3つのエリアでバランス良く、それぞれが相関し合いながら発展していけるようなまちづくりを目指している。それぞれの地域の特色に合わせたまちづくりを進めていくに当たり、考慮すべき点などあるか。</p> <p>松尾市長 私も大船の山の上の学校に通っていたので、大船の雰囲気は良く知っているが、鎌倉の2つの大きなまちに深沢が加わり、トライアングルのようになることは、想像もしていなかった。鎌倉は、3つのまちと山のみどり、海の自然が集まる恵まれたまちである。今ある宝を良く磨いていくことが重要だ。東京から鎌倉の距離はそう遠くない距離であり、東京に住んでいる人も、鎌倉のことを考えるとほっとする、というような場所になると良い。鎌倉がそのようなまちになることは、日本全体にとってプラスになるのではないか。</p> <p>松尾市長 非常に責任が伴うことだ。更に頑張らなくてはならないと思った。</p> <p>隈専門員 これまでの話において、テクノロジーを活かしていくことが大事だということであった。我々もテクノロジーを活かすということについて、企業や市民と一緒に取り組んでいこうと考えているのだが、最先端のテクノロジーをまちづくりの中にどのように融合させていくべきか。</p> <p>松尾市長 「オフィス」や「住宅」といったこれまでの分類を疑った方が良いと思う。「アフターコロナは在宅勤務の時代だ」と、簡単に言う人もいるが、今の日本の住宅のままでは、在宅勤務を行うことはなかなか大変である。例えば家の近くに、ICT環境が整備され、地域の人が集まってきて静かに仕事ができる拠点を造ることや、既に始めている企業もあるが、職場に保育園のような機能を持たせることなど、職場も住宅も変わらなければならない。その際、新しい ICT 技術が大きな助けとなる。最先端の ICT で武装されたピカピカの事務所とは別の形でのスマートシティというものが、鎌倉ならばできると思う。</p> <p>松尾市長 おっしゃる通り、ICT は手段であるため、人が人らしく豊かに仕事して生活するために必要なものを、テクノロジーで補っていく。</p> <p>隈専門員 その通りである。人間が主役だという考えが、これから益々</p>
--	--	---

		<p>大事になっていくのではないか。</p> <p>松尾市長 仕事のしやすさや豊かな生活などを追求した先に、新しいまちづくりができるというイメージで考えるということか。</p> <p>隈専門員 これまでの GDP などでの評価は、本来の豊かさとは異なるのではないかと皆が感じ始めていると思う。豊かさの定義や評価基準も全て見直す段階にきていると考える。</p> <p>松尾市長 そういう意味からすると、今後、新しい文明度のようなものを創っていく必要があると考える。そのためには、地に足の着いたまちづくりを行っていかねばならないと改めて感じた。</p> <p>我々が当たり前だと考えているものを脱ぎ捨てて、本当に必要なものを考え直さねばならないことに気づかせていただいた。今後、深沢地域のまちづくりを中心に、鎌倉全体における未来のまちづくりを進めていきたい。</p> <p>隈専門員 是非、市長に新しい基準を創る当事者となってもらいたい。</p>
6	資 料	なし